

おおぞらまえ

大空前遺跡(本発掘調査A)

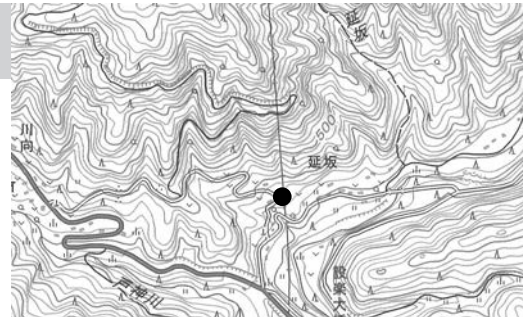
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度06分51秒 東経137度33分52秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年 5月

調査面積 80m²

担当者 酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司



調査地点 (1/2.5万「田口」)

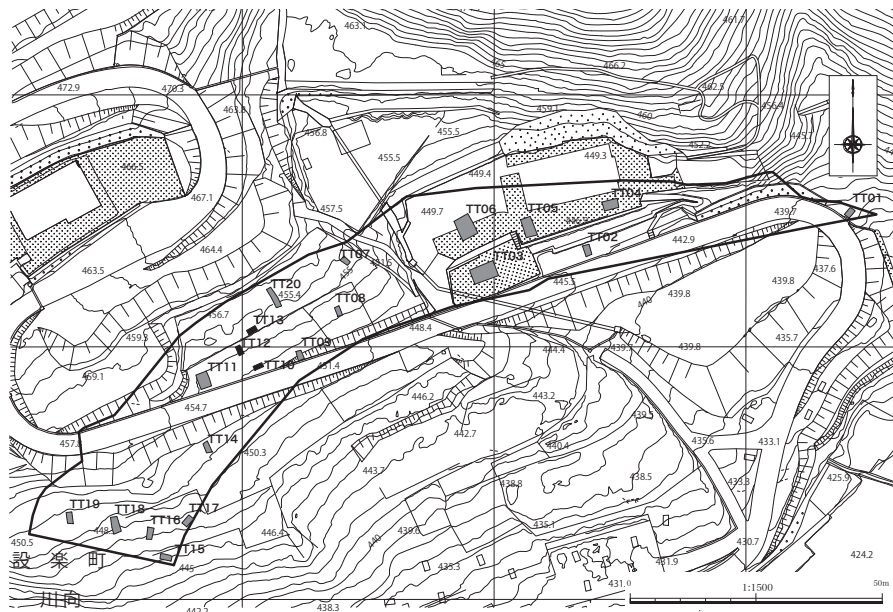
立地と環境 遺跡の標高は430～488mで、斜面地に立地する。遺跡の南西端には万瀬遺跡との間に沢がはいる。また、遺跡のほぼ中央と東端にも沢がみとめられ、東端の沢は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡へと続く。

調査の概要 大空前遺跡の本発掘調査Aは、平成28年度にダムの湛水域である標高437mまでの範囲を実施している。今回の調査は湛水域より上位に予定されている県道建設予定地にあたる。調査対象地は地形から大きく4つに区分できる。遺跡の東端の沢辺り (TT01)、中央の沢東側 (TT02～06)、中央の沢西側の茶畑付近 (TT07～13・20)、町道の南側 (TT14～19) である。

中央の沢西側の茶畑付近 (TT07～13・20) は大規模な造成による改変が認められなかった地区である。特にTT10・12・13は黒褐色砂質シルトが堆積し、下位に堆積する暗褐色シルト層とともに安定した層序が認められた。TT10からは縄文土器、TT12からは縄文土器と打製石斧が出土した。

今回のトレンチ調査によって中央の沢西側の茶畑付近以外の地区では、町道による造成および宅地造成、さらに土石流などによる沢の形成により、地形の改変が進み、遺物を含む包含層が削平されている。一方、包含層が認められたTT10・12・13の3ヶ所を中心に暗褐色シルト層および黒褐色砂質シルト層が堆積し縄文時代の石器・土器が出土し、縄文時代の包含層の存在が推定できる。

(永井宏幸)



大空前遺跡トレンチ配置図 (S=1/1,500)